埼玉工大紀要
No. 1 (1983)

T. S. エリオット習作詩瞥見

——死生対立の世界——

斎 藤 昭 二

I

人は現実の生活に満たされぬとき，ともすればその代償行動(substitute behaviour) として，自己の夢の実現される理想の世界を彼方に思い描くことをする。彼にあっては，自己の善性は疑うべくもないものであり，不幸の原因があるとすれば，それは自らの側にあるのではなく，自己の可能性の発現を阻む社会の状況にあると思えるのであろう。が，そうした人間が，現実世界での夢の挫折を契機に，問題はむしろ免れがたい原罪を背負った人間性に内在するのであり，理想の世界をロマンティックに夢見ることは現実からの逃避に他ならないと認識を改めると，それまでの自らの姿勢を極度に嫌悪することになるだろう。T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888–1965) の後年のロマン派批判の背景には，人生の門口にあって実は彼自ら抱いていたロマン派的な淡い夢とその挫折が少なくとも一因としてあったのではないだろうか。そんな図式的な見方が思い起こされるほど，彼の習作詩 (juvenilia) は若者らしいロマンティックな雰囲気に満ちているのである。

周知のように，1967年 John Hayward 編纂の *Poems Written in Early Youth by T. S. Eliot*[1] の出版により，初めて我々一般読者もエリオットの習作時代の詩[2]に容易に接することができるようになった。この詩集には彼の高校時代から大学時代にかけて書かれた習作詩10余篇が収められているが，そこには無彩色の荒地的風景をうたった後年の詩からは思いもつかないような明かるい世界が展開されている。無彩色ではない有彩色の世界が，そして彼方に思いを馳せる夢見がちな雰囲気が漂っているのである。

例えば1905年2月に *Smith Academy Record* 誌に掲載された“A Fable for Feasters” という詩にはロマン主義的特徴が素朴な形ながら表われて

いる。全12スタンザから成るこの詩の冒頭は次のように始まる。

In England, long before that royal Mormon
  King Henry VIII found out that monks were quacks,
And took their lands and money from the poor men,
  And brought their abbeys tumbling at their backs,
There was a village founded by some Norman
  Who levied on all travelers his tax;
    Nearby this hamlet was a monastery
    Inhabited by a band of friars merry.
("A Fable for Feasters", 1-8)

当時セント・ルイスの高校に通っていた16歳の彼は，この毎夜修道院に亡霊が現われるという内容の物語詩を書くにあたって，まず場面を遠く離れたイギリスに，そして時代をヘンリー8世が修道院解体をするずっと以前とはるか昔に設定する。そしてこのような枠組みの中に，超自然的存在である亡霊 (ghost) を登場させるのである。つまり時間的・空間的に隔ったものへの憧れ，そして超自然的なものの愛好というロマン主義的特徴を16歳のエリオットに読みとることができるのである。

また1905年同校の卒業式の日に自ら朗読した自作の詩において，彼は自分たちの人生の出発 (commencement) を次のようにうたい出している。

I

Standing upon the shore of all we know
We linger for a moment doubtfully,
Then with a song upon our lips, sail we
Across the harbor bar—no chart to show,
No light to warn of rocks which lie below,
But let us yet put forth courageously.

II

As colonists embarking from the strand
To seek their fortunes on some foreign shore

Well know they lose what time shall not restore,
And when they leave they fully understand
That though again they see their fatherland
They there shall be as citizens no more.
([At Graduation 1905], st. 1–2)

青春の日のとまどいと不安は見せながらも，自らをかつて理想の国を建国せんと船出した巡礼父祖 (Pilgrim Fathers) になぞらえているところに，はるかなるものへの憧れ，そして未来に希望を抱く当時の彼の夢見がちな姿勢が見られるのである。

では彼の理想とする生とはどのようなものであったのか。冬の朝ロンドン・ブリッジの上をうなだれながら歩く通勤者の群のイメージ等この問に対するネガティブな答にあってはあれほど能弁であった彼も，そのポジティブな答となると途端に凡庸になってしまう。我々はボードレール論[3]の中の有名な一節

So far as we are human, what we do must be either evil or good; so far as we do evil or good, we are human; and it is better, in a paradoxical way, to do evil than to do nothing: at least, we exist.[4]

の「何もしないよりは，悪を為すほうがましである。」という彼の苛立った答から逆推される“生命の躍動感に満たされた生”という漠然とした答で今は我慢しなければならない。

II

彼方に思いを馳せるロマンティックな資質と共に，エリオットの習作詩にしばしば見られるのは対立の技法である。主題と深く結びついた対立もあるが，多くは単なる色彩的対立・時間的対立等のアイロニーを狙うものである。その典型的な例が次の詩に見られる。

Song
The moonflower opens to the moth,
The mist crawls in from sea;

A great white bird, a snowy owl,
  Slips from the alder tree.

Whiter the flowers, Love, you hold,
  Than the white mist on the sea;
Have you no brighter tropic flowers
  With scarlet life, for me?

恋人のつれなさを難ずる内容の詩であるが，当時のエリオットにその切実な必要性があったかどうかは定かではない。ただ作者が対立の効果をはっきりと意図していたことは間違いない。恋人の心が熱帯の赤い花を思わせる情熱的な恋心といかにかけ離れたものであるかを強調するために，作者はその象徴である白のイメージを執拗に重ねてゆく。夜の闇を背景に白くかおりのよい「ユウガオが花開き」(*l.* 1)，「海の方から白い霧がたちこめてくる」(*l.* 2)，そして雪のように白い「シロフクロウがすべるように飛びかう」(*ll.* 3–4)。しかし，「恋人よ，君の抱く花は海にかかるその白い霧よりももっと白いのだ」(*ll.* 5–6) と。赤と白の対立が作者のもっとも腐心した点であることに間違いはない。

やはり習作詩の一篇でヨーロッパ詩に伝統的な 'Carpe diem' (=catch today) の主題をうたった "[A Lyric]: 'If Time and Space, as Sages say'" がマーヴェル (Andrew Marvell, 1621–78) の "To His Coy Mistresse" やヘリック (Robert Herrick, 1591–1674) の "To the Virgins, To Make Much of Time" および "Corinna's Going A-Maying" から主題や詩句を借入した混成詩とも言えるように，習作時代のエリオットは詩的技巧の腕を磨くことに専心していたわけで，"Song" に典型的に見られる対立の技法もその一つのあらわれなのである。

III

ではもう一つの習作詩 "Before Morning" に用いられている対立の技法に着目して，当時のエリオットの死生観を考察してみよう。

Before Morning

While all the East was weaving red with gray,
The flowers at the window turned toward dawn,
Petal on petal, waiting for the day,
Fresh flowers, withered flowers, flowers of dawn.

This morning's flowers and flowers of yesterday
Their fragrance drifts across the room at dawn,
Fragrance of bloom and fragrance of decay,
Fresh flowers, withered flowers, flowers of dawn.

作者は夜明け時の花の様子を描いている。家の外では「東の空一面が緋と灰との色を織りなす」(*l.* 1) 昼夜交替—生と死の交替—という自然界の壮大なドラマが進行している。が眼を家の中に転じても，同種の交替は起こっているのである。夜明け時に 'red' (生) と 'gray' (死) という新旧両要素が交錯するように，「夜明けの花」(flowers of dawn) は「生彩を放つ」(Fresh)「今朝を盛りに咲く花」(This morning's flowers) と「枯れてしまった」(withered)「昨日の花」(flowers of yesterday) という新旧両要素が共存し，「花開く香り」(Fragrance of bloom) と「朽ち果てる香り」(fragrance of decay) を放っているのである。そして 'red' (生) と 'gray' (死) の交錯する夜明けの空から確実に昼 (生) が生まれてくるように，「花びらを重ねている」(Petal on petal) ため一見しおれたように見える「夜明けの花」も「昼をまって」(waiting for the day) 確実に花開くのである。

生は死に至らねばならない，が一見したところ死と見えるものの中からまた新たな生が生まれるという自然の摂理を作者は昼夜交替という自然界の大きな現象と花の生死という自然界のささやかな現象との対応関係—つまり人間を含めた自然界のあらゆるものがこの運命を免れえない—の中にみとめているわけである。

しかし，ここで注目したいのはこの詩に見られる生死の対立観である。この詩には確かに昼 (生) と夜 (死) の交錯する夜明け時がうたわれているが，それは前作同様さまざまな対立 —'red' 対 'gray', 'Fresh flowers' 対 'withered flowers', 'This morning's flowers' 対 'flowers of yes-

terday', 'Fragrance of bloom' 対 'fragrance of decay'— の効果を狙うためである。また夜明け時には，昼（生）と夜（死）が共存するが，それはあくまでこの時間帯に限られた一時的な現象であって，夜が明けてしまえば，昼が夜の影響を受けることはないのである。つまりこの時点でのエリオットは昼（生）と夜（死）とが単に相対立する存在であり，死とは生の結末になってはじめて現われ，生に終止符を打つ存在に過ぎないと看做していることが窺えるわけである。

周知のように，後年のエリオットは生のさなかに死が暗い影をなげかける状況，生がまさに死に浸食されている状態—living death 或いは death-in-life— を問題にした。さきに言及したロンドンブリッジの上を歩く通勤者のイメージを見ると，

Unreal City,
Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed over London Bridge, so many,
I had not thought death had undone so many.
Sighs, short and infrequent, were exhaled,
And each man fixed his eyes before his feet.
(*The Waste Land*, I, 60–65.)

働き盛りでまさに生の絶頂にいるはずの通勤者の群は首をうなだれ，時々思い出したように短い溜息をつき，見る者にダンテの『神曲』「地獄篇」の堕地獄の亡者の姿を思い起こさせるのである。習作時代の死生観とはちがって，生のさなかに死が暗い影をなげかけているのである。

T. S. エリオット習作詩の世界は昼と夜・生と死が相対立するものと看做された世界，死は生に結末をつける終止符的存在で，生そのものと共存することはないと看做されていた世界であった。そして“生命の躍動感”に満たされた生々とした生が今現実には送り得ないにしても，そのような生が実現される理想の世界を彼方に思い描くことによって，かろうじて支えられていた世界であった。

しかし現実世界での夢の挫折を契機に，彼方に夢見るような視線を向けるのではなく，現実に鋭い批判の眼を向けはじめた時点から，生が既に死に浸食された灰色の荒地的世界がやがて出現してくるのである。真の時代

精神を担った詩人エリオットの誕生である。

〔注〕

(1) *Poems Written in Early Youth by T. S. Eliot* (London, 1967).

なお Donald Gullup, *T. S. Eliot: A Bibliography* (London, 1969) によれば，エリオットの習作詩出版の経緯は次の通りである。1938年に *Harvard Advocate* 誌が，同誌に以前掲載されたエリオットの詩8篇 ("Song: 'When we came home across the hill'", "Song: 'If space and time, as sages say'", "Before Morning", "Circe's Palace", "On a Portrait", "Nocturne", "Humouresque", "Spleen") を集め，*Eight Poems* と題して，同誌に特集掲載した。また1948年には再び同誌が前の8篇に "[Class] Ode: 'For the hour that is left us Fair Harvard, with thee'" を加え，*The Undergraduate Poems of T. S. Eliot* と題して，同誌に特集掲載した。これを翌1949年に詩の配列をかえ，また新たに "Song: 'The moonflower opens to the moth'" を加えて，同名の *The Undergraduate Poems of T. S. Eliot* と題して出版した。しかし，以上は皆著者エリオットの許可無しに為されたものであり，数多くの誤植があったために，すぐに回収の手続きが取られた。そこで1950年に John Hayward がエリオットの監督下に，これまでの10篇に新たに高校時代の作3篇 "A Fable for Feasters", "[A Lyric]: 'If Time and Space, as Sages say'", "[At Graduation 1905]" および少し後の作 "The Death of Saint Narcissus" を加え，誤植を修正して，*Poems Written in Early Youth by T. S. Eliot* と題してストックホルムで出版した。しかし，これは限定12部の私家版であり，この版に対する一般の関心が高くなったために，不正確な海賊版が出回ることを恐れて，同詩集を新たに Valerie Eliot の Note を付して1967年公に出版したのである。

(2) この詩集には1904年の冬から1910年の春にかけて書かれた詩14篇が収められているが，"Nocturne" 以降の詩は，例えば "Humouresque" にエリオット自身 (After J. Laforgue) と注釈を付しているように，当時彼が決定的な影響を受けはじめていたフランスの詩人ラフォルグ (Jules Laforgue, 1860–87) の詩の翻案とも言えるものである。よって筆者が本論で習作詩と称しているのはそれ以前の作，即ち "A Fable for Feastes", "Song: 'If space and time, as sages say'", "[At Graduation 1905]", "Song : 'When we came home across the hill'", "Before Morning", "Circe's Palace", "On a Portrait", "Song: 'The moonflower opens to the moth'" の9篇である。

(3) T. S. Eliot, "Baudelaire" in *Selected Essays* (London, 1951).

(4) *Ibid.*, p. 429.